

REIC 遺伝子医薬

臨床研究がスタート

遺伝子治療シンポで報告

前立腺癌を対象とした「REIC遺伝子医薬」の臨床研究の第1例が、1月25日に岡山大学でスタートしたことが1日、豊中市で開かれた「第9回遺伝子治療シンポジウム」で、那須保友氏(岡山大学病院新医療研究開発センター教授)から報告された。また、癌細胞内で特異的にウイルス複製能を向上させて、より

強い抗腫瘍免疫作用を発揮する遺伝子組み換えヘルペスウイルスG47Δが、悪性腫瘍の患者に対して良好な経緯を示していることも発表された。REICは、不死化細胞の研究から岡山大学で独自に単離同定された新規癌治療遺伝子で、多種類の癌に対して、癌細胞だけを選択的に細胞死に誘導すると共に、強力に

抗腫瘍免疫能を活性化させるという特徴がある。REIC遺伝子医薬の前立腺癌に対する臨床試験は、岡山大学ナノバイオ標的医療イノベーションセンター(ICON T)と岡山大学発のベンチャー企業「桃太郎源」が協働して、国内や米国などでの実施が進められてきた。前立腺癌を臨床試験の対象に選んだの

は「治療効果の判定に前立腺特異抗原のPSAが活用できる(那須氏)ため。

1月25日にスタートしたREIC遺伝子医薬の臨床試験では、再発高リスク限局性前立腺癌を対象に、術前補助療法(ネオアジュバント)として、腫瘍縮小と再発予防効果について検討される。

海外でのREIC遺伝子医薬の臨床試験としては、中国で胸膜悪性中皮腫を対象に、REIC遺伝子を組み込んだアデノウイルスベクター製剤「Ad-REIC」の臨

床試験が予定されている。また米国では、FDAが昨年3月30日付けでINDを受理しており、米国マウントシナイ病院をはじめとする米国の複数施設で、「再発高リスク限局性前立腺癌を対象とする術前治療」が実施される予定。

一方、藤堂貞紀氏(東京大学病院トランスレーショナルリサーチセンター)からは、三重変異を有する第三世代の遺伝子組み換えヒト単純ヘルペスウイルスI型(HSV-1)のG47Δを用いた癌のウイルス療法が報告された。

その後、2つの変異(r34・5遺伝子の欠失とICP6遺伝子の不活化)を有する第二世代のG207の安全性を維持しながら、抗腫瘍効果を格段に向上させたもの。2009年11月から昨年12月までに、2コホート6例の治療が実施されている。

藤堂氏は、「これまでもこのころ、G47Δ癌ウイルス療法に起因するグレート3以上の有害事象は認められていない。ウイルス療法法の確立は、悪性腫瘍をはじめとする癌治療に画期的な変革をもたらすものと期待される」と述べた。